

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）	研究 0-1
1. 言語文化学部・国際社会学部・総合国際学研究科	研究 1-1
2. アジア・アフリカ言語文化研究所	研究 2-1

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）

学部・研究科等	研究活動の状況	研究成果の状況	質の向上度
言語文化学部・国際社会学部・総合国際学研究科	期待される水準にある	期待される水準を上回る	質を維持している
アジア・アフリカ言語文化研究所	期待される水準を上回る	期待される水準を上回る	高い質を維持している

注目すべき質の向上

アジア・アフリカ言語文化研究所

- 海外拠点である中東研究日本センター（レバノン共和国）を活用した共同利用・共同研究課題を平成 22 年度から実施しており、研究成果を直接国際的に発信するため、報告書を英語で公表している。
- アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の公開を推進しており、第 2 期中期目標期間（平成 22 年度から平成 27 年度）中に、言語資料を全文・横断的に検索する検索システムの構築、画像データを閲覧できる現地資料のデジタルアーカイブの構築、特定の目的に特化したデータベースやツールの構築等を実施しているほか、研究資源をウェブサイト公開するなどしている。

言語文化学部・国際社会学部・総合国際学研究科

I 研究の水準 研究 1-2

II 質の向上度 研究 1-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 「若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム」、「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」及び「頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム」を活用して若手研究者を海外での研究活動に従事させるとともに、海外の大学、研究機関とのネットワークを形成し、国際共同研究に取り組んでいる。
- 語学研究所、総合文化研究所等において『語学研究所論集』、『総合文化研究』等の研究所誌を、それぞれ年度当たり1冊から2冊刊行している。
- 国際会議、国際シンポジウムや研究集会等を開催しており、国際日本研究センターと現代インド研究センターを含む各研究所の研究集会数は、第1期中期目標期間（平成16年度から平成21年度）の合計320件から第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）の合計595件となっている。
- 言語研究について、平成19年度から平成23年度実施のグローバルCOEプログラムでは、当該大学のアジア・アフリカ言語文化研究所と連携し、フィールド言語学、コーパス言語学及び言語情報学の各領域で研究活動を推進するとともに、「言語能力や学習到達度の可視化に関する研究」や「言語能力の教育指標開発プロジェクト「CEFR-J×27 Project」」へ、研究成果を継承・発展している。

以上の状況等及び言語文化学部・国際社会学部・総合国際学研究所の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 学術面では、特に外国語教育、ヨーロッパ史・アメリカ史の細目において卓越した研究成果がある。
- 卓越した研究業績として、外国語教育の「コーパス言語学に基づく到達度指

標 CEFR-J の開発に関する研究」があり、平成 26 年度に国際学術誌において研究成果に関連した特集号が編纂されている。また、英語コーパス学会 2014 年度学会賞を受賞している。

- 特徴的な研究業績として、美術史の「中世イベリア半島における異文化交渉と美術」、政治学の「ラテン・アメリカ諸国における民主主義と政治参加についての研究」がある。
- 社会、経済、文化面では、特に外国語教育、文学一般の細目において卓越した研究成果がある。
- 卓越した研究業績として、文学一般の「翻訳研究・文化研究」があり、2011 年度国家翻訳大賞（個人部門）、ガイマン賞 2015 の小野耕世特別賞、第 1 回日本翻訳大賞を受賞している。
- 特徴的な研究業績として、国際関係論の「現代世界の武力紛争と平和構築活動についての研究」がある。

以上の状況等及び言語文化学部・国際社会学部・総合国際学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、言語文化学部・国際社会学部・総合国際学研究科の専任教員数は 184 名、提出された研究業績数は 9 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 7 件（延べ 14 件）について判定した結果、「SS」は 4 割、「S」は 6 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 3 件（延べ 6 件）について判定した結果、「SS」は 7 割、「S」は 3 割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 平成 24 年度の 2 学部改組により、研究対象地域を拡大し、中央アジア、アフリカ及びオセアニア地域を加えている。
- 言語研究について、平成 19 年度から平成 23 年度実施のグローバル COE プログラムでは、当該大学のアジア・アフリカ言語文化研究所と連携し、フィールド言語学、コーパス言語学、及び言語情報学の各領域で研究活動を推進するとともに、「言語能力や学習到達度の可視化に関する研究」や「言語能力の教育指標開発プロジェクト「CEFR-J×27 Project」」へ、研究成果を継承・発展している。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 「翻訳研究・文化研究」では、2011 年度国家翻訳大賞（個人部門）、ガイマン賞 2015 の小野耕世特別賞、第 1 回日本翻訳大賞を受賞している。
- グローバル COE プログラムを起点として継続的に研究成果を蓄積しており、「コーパス言語学に基づく到達度指標 CEFR-J の開発に関する研究」では、平成 26 年度に国際学術誌において研究成果に関連した特集号が編纂されているほか、英語コーパス学会 2014 年度学会賞を受賞している。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

アジア・アフリカ言語文化研究所

I	研究の水準	研究 2-2
II	質の向上度	研究 2-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目 I 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- アジア・アフリカ諸地域の言語・文化等に関する研究資源拠点としての活動を進めることを目標とし、アジア・アフリカ諸言語のオンライン電子辞書と全文検索システム、現地調査で得られた図像資料等の共同研究に資する研究資源をウェブサイトに公開している。
- 研究者養成活動として、「中東☆イスラーム関連セミナー」やフィールド言語学ワークショップ等を実施しているほか、「文化／社会人類学研究セミナー」や言語研修修了者に対するフォローアップ・ミーティング等の企画を立案し実施している。
- 海外拠点である中東研究日本センター（レバノン共和国）とコタキナバル・リエゾンオフィス（マレーシア）を中心とした国際共同研究を実施し、臨地研究を推進している。
- 査読付き学術雑誌3誌を年2回程度刊行し、共同利用・共同研究課題の成果を発表している。

観点1-2「共同利用・共同研究の実施状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）中に取り上げた共同利用・共同研究課題は60件となっており、延べ842名の共同研究員が参加し、研究会を474回開催している。また、共同利用・共同研究課題に関連した国際シンポジウム、ワークショップ等を117件開催している。
- 共同利用・共同研究課題に国内外の多くの研究者が共同研究員として参画することで国際的な研究活動を行っており、2か所の海外拠点を活用して、現地の研究者が参加する国際シンポジウムやワークショップ、共同利用・共同研究課題の研究会やセミナーを実施しているほか、消滅の危機にある言語の国際連携研究体制構築を進めるなど、国際的な共同研究体制の強化を図っている。

以上の状況等及びアジア・アフリカ言語文化研究所の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 学術面では、特に文化人類学・民俗学の細目において卓越した研究成果がある。
- 卓越した研究業績として、文化人類学・民俗学の「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」があり、研究成果である『創造するアフリカ農民—紛争国周辺農村を生きる生計戦略—』は、平成25年に日本熱帯生態学会吉良賞奨励賞等を受賞している。
- 特徴的な研究業績として、言語学の「アジア書字コーパス拠点」、アジア・アフリカ史の「近世イスラーム国家の多元的社会および周辺世界との関係」がある。
- 社会、経済、文化面では、特に文化人類学・民俗学の細目において特徴的な研究成果がある。
- 特徴的な研究業績として、文化人類学・民俗学の「「シングル」と家族—縁（えにし）の人類学的研究」があり、研究成果を新聞に年間の連載として掲載しているほか、生涯学習セミナーでの講演を行っている。

以上の状況等及びアジア・アフリカ言語文化研究所の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、アジア・アフリカ言語文化研究所の専任教員数は33名、提出された研究業績数は8件となっている。

学術面では、提出された研究業績8件（延べ16件）について判定した結果、「SS」は3割、「S」は4割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績1件（延べ2件）について判定した結果、「S」は10割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1件の研究業績に対して2名の評価者が判定した結果の件数の総和）

II 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 高い質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 平成 22 年度以降の共同利用・共同研究課題は、共同研究委員会が実績の審査を行い、コメントを所内に公開することで改善を促しており、第 2 期中期目標期間に実施している共同利用・共同研究課題については、19 件が評価に基づいて実施方法等の改善に取り組むことによって、翌年度以降の評価が向上している。
- 国内での研究活動のほか、2 か所の海外拠点を活用した国際的な共同研究を実施しており、アジア・アフリカの言語文化に関する研究の拠点としての機能の強化を図っている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 海外拠点である中東研究日本センター（レバノン共和国）を活用した共同利用・共同研究課題を平成 22 年度から実施しており、研究成果を直接国際的に発信するため、報告書を英語で公表している。
- アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の公開を推進しており、第 2 期中期目標期間中に、言語資料を全文・横断的に検索する検索システムの構築、画像データを閲覧できる現地資料のデジタルアーカイブの構築、特定の目的に特化したデータベースやツールの構築等を実施しているほか、研究資源をウェブサイト公開するなどしている。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

2. 注目すべき質の向上

- 海外拠点である中東研究日本センター（レバノン共和国）を活用した共同利用・共同研究課題を平成 22 年度から実施しており、研究成果を直接国際的に発信するため、報告書を英語で公表している。
- アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の公開を推進しており、第 2 期中期目標期間中に、言語資料を全文・横断的に検索する検索システムの構築、画像データを閲覧できる現地資料のデジタルアーカイブの構築、特定の目的に特化したデータベースやツールの構築等を実施しているほか、研究資源を

ウェブサイトに公開するなどしている。

